

へかくと申上侍りければ、即秀吉公へ文箱の符をも切す上しかば、右筆にて侍る山中山城守をして御一らん有に、女の文にて筆勢いとうつくしく書つゝけたり、○中略秀吉公山城守をして御らんなされ憐なる事共也、然ば龍造寺かたへ、此瀬川采女正を歸朝せさせよと、御内書有しかば、頓て肥州へ參たり、

〔常山紀談 十四〕石田西國の諸將をかたらひて兵を起す時、諸大名の北の方を、大坂城中に取入んとするを、北の方○細川忠興妻聞て、傳に付られし、河喜多石見、稻留伊賀、小笠原正齋を呼て、吾此所を出ん事思ひもよらず、城中に取こめられんは恥辱なり、よく斷を申候へ、猶聞入られずば、是を限と思ひ定むべしと語られしかば、正齋殿東國に向はせ給ひし時、おもひかけざる事のあらんには、正齋はからひて、武將の恥なさらしそと、仰置れ候ひき、敵奪ひとらんとするならば、其時思召切せ給へと申しけり、かゝる處に、城中に入よと使を以ていはせしかば、再三斷の旨を述べれども聞入ず、七月十七日の未の刻ばかりに、大坂の軍兵五百餘り、玉造口の屋敷をとりまきて、とく城中に入申されよ、さらずば亂入て奪取んと呼はりけり、女房ばらあはて、泣悲めども、北の方はさわぐ色もなく、かくあらんとは兼ておもひ設つる事ぞとよ、正齋介錯せよ、われ生る世にまみえざりし人々に、死しての後も見られんはよからじとて、面に覆面打かけ、くゝり袴著て刀を抜胸につきたてられしかば、正齋眉尖刀にて介錯し、其まゝ、そこに腹を切んとせし處に、正齋が小性はしり來り、殿の北の方と同じ所に自害あらば、後の誹の候べきと云ければ、正齋あまりのいたましさに、わすれたるよとて、障子の外に走り出、家に火を懸け、石見と共に腹切て、炎の中に死したりけり、

〔常山紀談 二十〕關ヶ原亂の後、毛利森とも記豊前守勝永は、土佐へ流罪せられしに、大坂に事起ると聞、或夜妻にいひけるは、我罪有て、かゝる所に居住し、汝にも斯うき事を見する事ぞとよ、され